

創り出される労働市場

非合法就労者の移動のメカニズム

丹野 清人

はじめに

- 1 職長ネット，建設ネット，エスニックネット
- 2 職長ネット上の外国人労働者
- 3 職長ネットをつなぐ建設ネット
- 4 エスニックネットによる移動
- 5 3つのネットワークの重なりと連鎖のあり方
- 6 外国人労働者の移動と社会的必要
- 7 結語にかえて

はじめに

本稿の目的は、外国人労働者の移動を水路づけるものは何かを考察することである。外国人労働者の移動を説明する方法として、これまでに、移動する主体を重視する立場（Harris, J./Todaro, M.P., 1970, Stiglitz, J.E., 1974等）と、移動を引き起こす構造的要因に重きをおく立場（Piore, M.J., 1979, Sassen, S., 1983, 1988, Portes, A., Jensen, L., 1987等）が示されてきた。前者はプッシュ・プル要因に注目し、後者は国際分業に焦点を合わせるが、どちらも賃金格差や移民の創り出すネットワークを説明変数にして議論を展開する。

しかし、日本に於ける外国人労働者の移動という点に着目するならば、外国人労働者の移動には別のファクターが働いていることが分かる。それが雇用者側のネットワークである。本稿では1992年4月から1995年7月までの外国人労働者および雇用者に行った聞き取り調査をもとに、外国人労働者の移動を説明する枠組みとして、「職長ネット」「建設ネット」というネットワークについて論じていく。さらに、これらネットワークを離れて外国人労働者が移動する場合に、彼らが負わなければならないリスクを示し、それにもかかわらず、外国人労働者が雇用者側のネットワークを離れていく場合にはどのような契機があるかを「エスニックネット」を通して考察する。最後の重商主義者サー・ジェームズ・ステュアートが用いた「政治的必要」という視点を手がかりにして、私はこの契機を考えてみる。この概念は継承されて、古典派経済学の完成者であるリカードウにおいて賃金とは労働者の生活習慣で決定される（Ricardo, David, 1821, pp.96-97, 羽鳥・吉澤訳, 1987, p.139）と

いう解釈につながる。これは労働価値説の重要な柱になるものである⁽¹⁾。この古典派経済学の概念が現代の外国人労働者を論じるときにも有効な手がかりを与えてくれる。外国人労働者の移動を説明する重要な軸として私はこの概念を用いて議論を展開する。

本稿で述べるところの非合法就労者とは「出入国管理および難民認定法」でいうところの滞日在留資格外労働者のことである。彼らを私が資格外でなく非合法と言いつけるのは、彼らが働く仕事場で、ともに働く日本人労働者や彼らを指揮監督する職長から浴びせられる言葉の中に、「非合法」あるいは「不法」という発言を多く聞き取れるからである。ここで展開する議論は労働が行われているショップフロアと労働者を取りまく生活世界に焦点を当てたものである。また私が使用者側が創り出すネットワークに注目していることもあって、使用者側の言説を用い、非合法就労者としてイラン人・パキスタン人労働者を呼ぶことにした。

本稿で取り上げたイラン・パキスタンの国籍の外国人労働者は、その多くが滞日経験5年以上で、生活様式として一人住まいなら1Kのアパートあるいはワンルーム、二人ならば6畳2部屋にキッチンというものであり、当然、テレビ、電話、ビデオ、CDカセットは必需品であり、自動車の所有も珍しいものではなかった。このように本稿は滞日経験を積み重ね、日本でネットワークもできあがっていた時期についての検証であり、また多くの点で調査時点における時期的な制約を受けるものである。

1 職長ネット、建設ネット、エスニックネット

まずはじめに本稿で用いる3つのネットワークの定義を行いたい。

第一に職長ネットとは、現場部門の責任者が様々な産業に属する他社の責任者と形成したネットワークである。ここで職長という言葉を使うのは、このネットワークを構成しているアクターの共通する特性が、それぞれの現業部門の責任者であるからだ。産業によって、彼らは「職長」「親方」「世話焼き」「樺心」「リーダー」と異なった呼称で呼ばれるが、もっとも一般的に用いられている「職長」というタームを、私は用いることにする。本稿で議論する職長ネットは、私が1992年から調査を続けている中小企業間にはりめぐらされている、各職長が個人としてつきあう中から成立したものを念頭においている。ここでは現場部門の責任者を職長と定義したが、本稿で議論される企業規模においては、彼らは職長であると同時に経営者である場合も多い。しかしながら、彼らのつながりは経営者という側面によってつくられているのではなくて、現場の責任者という共通の顔にその最大の特徴がある。

職長ネットは「場」の共有によって成立する。個人的な結びつきによって成立するものであるか

(1) 古典学派の完成者たるリカードウにおいても、賃金が一元的に労働者の生存費で決まると扱われているわけではない。彼の『経済学および課税の原理』でも第5章「賃金について」では生存必要説であるが、その他の複数の部分において彼は同時に賃金が生産性および労働市場の需給関係で決まるとも述べている。こうした古典派経済学者の賃金決定についてはスティラーティの『古典派経済学における賃金理論』(Stirati, 1994)の第二章、第三章が詳しく論じてある。

ら、電話等の場の共有によらない手段によってもネットワークを構築することは可能である。しかしながら、場の共有こそがこのネットワーク構築の最も重要な契機になる。場の共有は、共通の文化を持つことを意味する。共通の文化とは、親方である職長が子方である労働者と仕事が終わった後に、酒席を共にしながら意志の疎通をはかる習慣である⁽²⁾。この習慣のある職長が同じ飲み屋に通う中で、異業種であるが極めて地理的に近い者同士の間には仲間関係をつくり出したもの、それが「職長ネット」である。

非常に狭い地域に、すなわち極域として存在する職長ネットに、類似のネットワークが重なり合うことによって現実の労働者の移動を水路づける関係性が生まれる。職長ネットの上を移動する労働力は、職長ネットの外部から取り込まれるからである。さらに職長ネットに労働力を供給する外部もまた、ネットワークを形成している。本稿で、職長ネットに外国人労働力を供給する外部のネットワークは、建設ネットとエスニックネットである。

建設ネットとは、職長ネットのなかの建設業者が、地元ゼネコンを中心にまとめあげた建設業の同業者ネットワークである。これは仕事が終わった後の酒席を媒介項の一つとする点で職長ネットと同じであるが、異なる地域に会社をかまえ専門の仕事をこなすそれぞれの個別企業が、一つの現場で労働をするという建設業の特徴に最も起因するものである。

建設業は、その特性として、同じ現場に様々な専門工事業者が入れ替わりながら協同して一つの完成物を作り上げていく。工場における製造業の生産活動と違い、建設業では作業を行う現場は一時的なものである。工事の規模も毎回異なるものであるから、必要な労働力も一定していない。当然、企業側の対応として、必要最小限の労働者を常勤職員として雇い入れ、後は工事の規模に合わせて短期の労働者を手配したり、同業者や下請けへと請け負わせるのである。このように建設業では企業には同業者や下請けを組織する能力が、現場をあずかる職長には短期の雇用契約を基本とする不安定就労者を組織する力量が必須のものになる。こうしてできた建設業の職長間にはりめぐらされた、雇用をめぐるネットワークが建設ネットである。

最後に本稿におけるエスニックネットとは、外国人労働者の側が作り上げたネットワーク全般を指すものである。これは一般に地縁・血縁を基礎につくられることが多いものであるが、異国の地における宗教的連帯や金銭を取って仕事を紹介する市場的關係をも含むものである。契機はさまざまであるが、外国人労働者の側が使用者とは無関係につくり出したネットワークを、本稿ではエスニックネットと定義する。

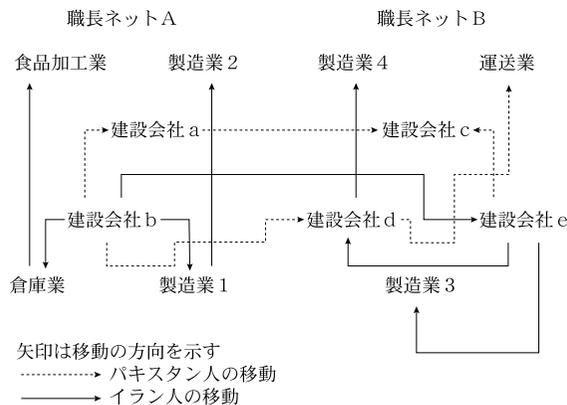
次節以降で、職長ネット、建設ネット、そしてエスニックネットがどのように重なりながら現実の労働者の移動が創り出されていくのかを論じる。具体的なミクロ場面をとりあげて外国人労働者の移動に作用している諸力がいかなるものであるのかを示していく。

(2) 私はこうした習慣を「労働をめぐる文化」と表現したが、これを文化として扱いうことは、現場作業員の求人誌である『ガテン』で1996年9月より連載されている「これが親方の掟だ」のシリーズにみることができる。そこでは現場労働に初めて従事する者への現場作業におけるしきたりが様々なエピソードを通して紹介される。この中で異なる業種で酒を媒介にするつき合いが、地域に関係なく見られるものであるとしばしばとりあげられている。

2 職長ネット上の外国人労働者

職長ネットの上をどのように外国人労働者が移動していくかを、具体例をもって、以下に説明していく。本稿で、私が取り扱う職長ネットは2つである。一つが川崎市宮前区の溝の口で展開している職長ネットAであり、もう一つが横浜市神奈川区の東神奈川周辺の職長ネットBである。前者で重要な役割を果たしているプレーヤーは建設会社aであり、職長ネットが形成される共通の場は、この会社の経営者が内縁の妻に経営させているカラオケスナックである。後者、職長ネットBのキーとなっているのは建設会社cと建設会社dであり、共通の場を提供しているのは、この2社の経営者と同郷である沖縄県出身の夫婦が経営する飲み屋である。すなわち、職長ネットとはこれらの飲食店における、仕事の後の一杯が作り出す人間関係の一形態である。調査開始の時点である92年4月から95年7月時点までの外国人労働者の移動から、このネットワークを示したのが図1である。

図1 職長ネット上の外国人労働者の移動



ここから外国人労働者が地域のミクロ労働市場で移動を行うときに、職長ネットが大きく働いていることが理解できる。また、ここに空間的には離れた職長ネットAと職長ネットBが、建設業を通して結ばれていることが読みとれる。この職長ネット間を結ぶ建設ネットは次節に議論を譲るとして、ここでは職長ネット間が建設ネットによって接合されていることを確認して、それぞれの職長ネット内部における労働力の移動を論じる。

なぜに外国人労働者は、職長ネット上を動くのか。このことの一つの理由として、職長ネットを構成するそれぞれの企業は何らかの形で不安定就労を一定の規模で必要としている、という共通項がある。しかし第二次部門とも呼ばれる不安定就労セクターであるから、必然的に外国人労働者が入ってくるのではない。職長ネットが外国人労働者を確保する上で大きなアドバンテージとなっているのは、住居を与えることのできる可能性である。不安定就労者にとって、職長ネットに乗ることは職の確保であると同時に住居の確保にもなるのである。どうして職長ネットは彼らに住居を与えることができるのか。それは職長ネットAの場合は職長ではないが、職長達のたむろするカラオ

ケスナックの常連に不動産会社の経営者がおり、建設会社bの資材置き場、および製造業1と食品加工業の大家でもある彼が、空いているアパートを積極的に貸してくれるからである。職長ネットBの場合も、ネットワークのなかに不動産屋はいないのだが、職長達の信用でアパートを用意できるのである。

アパートは、職長ネット内で最初に雇用した企業が保証人になる。アパートに関する実費の全ては労働者が負担することになっているが、職長ネット内で外国人労働者が移動している限りにおいて、雇用先が変わっても住居を引き払う必要はない。しかし、職長ネットを外れてしまうと、住んでいるアパートから通える範囲で新しい仕事を見つけることのできる可能性は少なく、新しい仕事を探している間に貯蓄を使い果たしてしまうので引き払わざるをえなくなる。職長ネットに乗ったときとは反対に、職長ネットから外れることは職を失い、やがては住居をも失うことが必然となるのである。こうした住居の確保という条件が、職長ネット内での外国人労働者の移動を可能にしているのである。

このような限られた時間内で、次の仕事場を見つけるように仕向けられる外国人労働者にとって、移動の機会を与えてくれる重要な場所が職長達が集う職長ネットなのである。仕事が終わった後に親方と飲みに行く酒場で、同じように労働者と共に、あるいは一人で飲みに来た他の職場の職長との出会いの場が、職長ネット内での外国人労働者の移動をつくり出す。職長ネットAにおける食品加工業、職長ネットBにおける運送業において、そこから先に矢印がのびていかないのは、これらの会社の職長が労働者と共に飲みに行くという行為をほとんどしないからである。逆に、矢印がのびていく下になっている会社は、全て何らかの機会の折りに職長が労働者を連れて、職長達の集う場に連れていっているのである。

このような場で他の職長は労働者に、「もし今の場所の仕事がなくなったらウチに来なさい」と声を掛けるのである。この場所にもし労働者だけで飲みに行ったとしても、他の職長達が彼らに声を掛けることはしない。職長達からすると、労働者であれば誰でも良いわけではない。他の知り合いの職長の下で働いていること、これが労働者として使える人間の証明になっているのだ。狭い地域のなかで、職長ネットのなかにいることは、外国人労働者にとって、ある一定の使用者達には彼の労働能力を裏付けするある種の信用を示すものであり、その信用が通じる限りにおいて、労働力の移動がスムーズに行われる。しかしながら業種も異なり、生産性も様々である職長ネットの内部での移動は、移動する先の賃金が今より良くなる保証はない。職長ネットAにおける製造業2、職長ネットBにおける製造業3から移っていく者がいないのは、そこが職長ネットの内部で一番条件が良いからである。

3 職長ネットをつなぐ建設ネット

前節で述べた職長ネットでの外国人労働者の移動が、職長ネット上にいることで外国人労働者に付与される「信用」が鍵であることを確認して、ここでは職長ネットをまたいでいる移動に焦点をあてる。この職長ネットをまたぐ移動が建設業によってなされていて、この移動は建設業のある特性によって引き起こされているので、これを建設ネットと呼ぶことにする。建設ネットとは、大手

ゼネコン，地元ゼネコンの下で組織される建設現場での職長ネットのことである。この意味で職長ネットの一類型である。しかし，第2節で述べた職長ネットとはいくつかの点での違いを見せる。その第一が，職長ネットが狭い地域において成立していたのに対して，建設ネットはより広範な地域で形成されることである。建設業でこのようなネットワークが広範な地域に形成されるのは，その特殊な産業的特性によるものである。建設業では工場における製造業の生産活動と違い，作業を行う現場は一時的なものである。工事の規模も毎回異なるものであるから，必要な労働力も一定していない。当然，企業側の対応として必要最小限の労働者を常勤職員として雇い入れ，後は工事の規模に合わせて短期の労働者を手配したり，同業者や下請けへと請け負わせる。建設ネットとはこうして作られるものである。

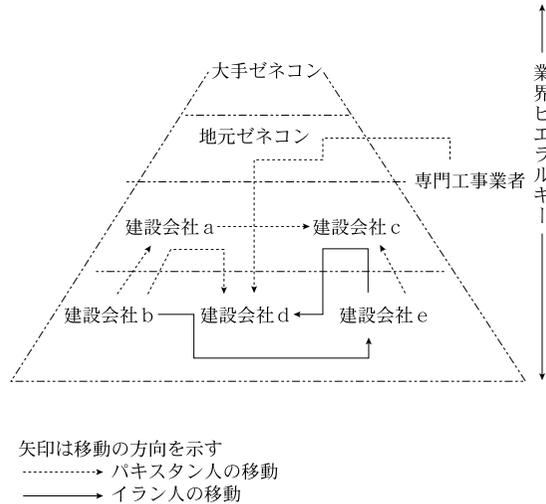
建設ネットの第二の特徴は，職長ネットが仕事が終わったあとの酒席を媒介にしていたのに対して，単なる仕事のあとの一杯という以上に同じ現場で異なる工程が同時に進行していくことにある。実際の現場では，様々な専門工事を行う業者が元請けのたてたスケジュールに従って，個別企業が担当する仕事は全体の仕事に同期化されなければならない。一つの工程が遅れることは，全体の工期を遅らすことになる。そのために，建設業の工事現場では，特殊なスキルを持った熟練工以外の労働者，つまり熟練工を補助する単純労働者については，仕事が順調に進んでいる業者から遅れている業者への人の貸し出しがよくみられる。貸し出された労働者の賃金は借り受けた企業が払うため，貸し出す企業にとっても人件費を減らせるという利点がある。このような現場レベルでの人間の貸し借りは，工期の短縮＝生産性の上昇をもたらすものであるので積極的に用いられる手段である。このなかで外国人労働者の貸し借りも行われ，今の現場が終わったあとの契約のない労働者への誘いもある。これら二つの特徴より，建設業において地域をまたぐ外国人労働者の移動が起こるのである。職長ネットAの建設会社aから職長ネットBの建設会社dへのパキスタン人の移動，職長ネットAの建設会社bから職長ネットBの建設会社eへのイラン人の移動が，地域をまたぐ建設ネットの役割を端的に示す。さらにここにおいて建設ネットでは全国的に渡り歩く専門工事業業者から建設会社dへのパキスタン人の移動をみることができ，職長ネットに外国人労働者を供給する役割が建設ネットにあることが理解できる。

本稿において，専門工事業業者としてこのネットワークに外国人労働者を供給したのは，山形県に本社を置きながら全国を飛び回っている型枠工事会社である。こうした専門工事業の仕事は賃金は非常に高い職であるが，専門的技術を習得するのに時間を要するので，仕事量に比して慢性的な人手不足になっている。そのため熟練技術を持つ専門工を補佐する「見習い」の仕事に外国人労働者が就くことも多い。専門技術で各地を渡り歩くこうした専門工事業業者もやはり他の建設業者と同じように，建築物＝現場の規模に合わせて労働者を用意しなくてはならない⁽³⁾。一般に常に仕事を抱えていて比較的安定して雇用を維持している専門工事業では，外国人労働者も入れ替わりは多くない。しかし，それでも仕事の規模いかんによっては余剰労働者を抱えてしまう。こうしたことが予

(3) 本稿で述べている建設業の特性，とりわけ専門工事業業者の特徴が決して例外でないことは『ガテン』1997年10月23日号における特集記事「建設業で成り上げられ」における，専門工事業業者社長への複数のインタビューでも明らかである。

想される場合や、既知の仕事仲間から頼まれた場合などで、現場の職長の判断で、労働者を譲る場合がしばしばみられるのである。こうした関係から生まれた外国人労働者の流れが以下の図2である。

図2 建設ネット



ここで注意しておくべきことがある。それは建設会社 b から建設会社 a へ、および建設会社 e から建設会社 c へのパキスタン人の移動、建設会社 e から建設会社 d へのイラン人の移動という職長ネットの移動と建設ネットの移動が重なっている部分についてである。これは職長ネットおよび建設ネットの両方の要素をもつ移動であるが、直接的には建設業に特有の産業的特性による移動である。しかしながらここには産業的特性にとどまらない、職長同士の日常的なつきあいが大きく働いていることを確認して、職長ネットに外国人労働者を供給するもう一つのネットワークであるエスニックネットに進むことにする。その後各ネットワークの連鎖について検討を加えるときに、再びこの問題をとりあげる。

4 エスニックネットによる移動

この節では職長ネットで働く外国人労働者が、職長ネットに外国人労働者を呼び込む場合を論じる。すなわち、先行者による呼び込みをここではエスニックネットと呼ぶ。これには先行者が自己の地縁・血縁者を海外からあるいは日本の他の地域から呼び込む場合、それとは別にまったく面識のない他の外国人労働者に仕事を紹介する場合など、あらゆるケースがある。そこで、仕事についての情報が外国人労働者から発せられている全てについて、本稿ではエスニックネットとする。

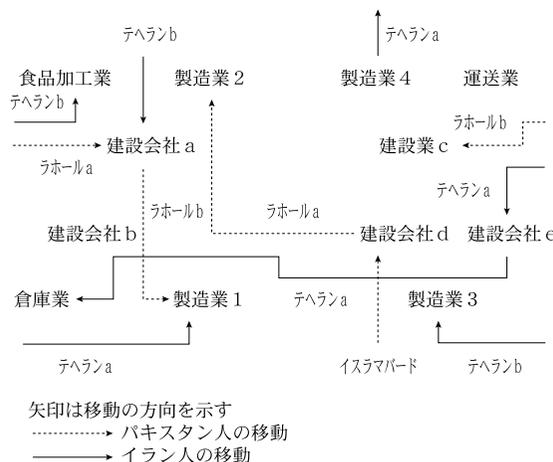
職長ネットから捉えるエスニックネットの特徴は、第一にその受動的な性格にある。ある時は地縁・血縁によって、またある時は金銭との引き換えによる仕事の紹介によって、エスニックネットを通して呼び込まれる労働者が職長ネットに入れるか否かは、ひとえに彼を呼び入れた先行者が持

つ職長からの信頼にかかっている。職長は呼び込んだ者への信頼から、呼び込まれた者を雇用する。決して、呼び込まれた者を選択したのではない。職長が選んだのは呼び入れた外国人労働者なのである。そしてこの意味において、職長は職長ネットへ外国人労働者を誘い込むゲートキーパーとしての労働者を選択しながら、エスニックネットを選択しているのである。

第二に、エスニックネットは職長ネット・建設ネットで動く場合に比べて、移動の確実性が低いものにならざるをえない。職長ネット・建設ネットは人事採用権を持つ職長が、直接に労働者に手を伸ばすものである。募集を掛けている側が、ダイレクトに雇用するのであるからほぼ確実に移動が可能である。これに対して、エスニックネットは募集を掛けている職長の意を受けたり、その意を汲んだりした労働者が、何らかの手段を使って新たな労働者を見いだそうとするものである。職長は多分に複数のゲートキーパーに声を掛けるので必要とする以上の労働者が集められるきらいがあり、確実に雇用にいたるとは限らない。そのために、エスニックネットは職長ネットを通しての選抜よりも、低い確実性にならざるをえない。

第三に、エスニックネットはより広範な地域の情報をもたらすものではあるが、現在居住している地域の雇用情報を持っているとは限らない。情報の領域性が異なるからである。確かに、同じ職長ネット内でのエスニックネットを使っての移動もあるが、この場合は労働者が移動する職長間で了解ができていたので、ほぼ職長ネットによる移動といて良い。しかし、職長ネット内の仕事についての情報が、外国人労働者の仕事以外の生活領域や彼らのサイドビジネスを媒介として、職長ネットとは全く関係ない外国人労働者に伝えられる。この伝達空間は外国人労働者の間での情報交換媒体に携帯電話が使用されるようになって急速に広がっているが、92年から95年にかけての本稿で分析をしている時期では、まだ携帯電話所持者はそれほど多くなかった。あとで詳しく論じるが、この段階での仕事の情報についてのエスニックネットでのやりとりは、外国人労働者が稼いだ金銭を送金する行為と密接に結びついていた。述べてきた3つの特徴を持つエスニックネットを示したのが図3である。図1におけるイラン人・パキスタン人の移動とは明らかに違う流れがみてとれるだろう。

図3 エスニックネット



上の図3における労働者の流れにおいて、これまでとは違った区分が必要になる。それがエスニシティに基づく区分である。本稿で論じている職長ネットでは、イラン人はテヘランAとテヘランBとに分けられるし、パキスタン人はラホールAとラホールB、そしてイスラマバードに分けることができる。ここで情報伝達行為としての、送金行為とエスニックネットとの関係について少し詳しく述べる。イラン人、パキスタン人どちらの労働者も、送金はいていの場合アメリカドルでの送金である。彼らのほとんどは、現金としてのドル紙幣を送金する。両国は外国為替に対して変動相場制をとっていないが、政府が決めた自国通貨との固定レートで外貨は交換される。このレートが、外貨を持ち込んだ者に対して著しく不利なことは言うまでもない。だが、既に両国においては外貨で商品を購入したり、外貨と自国通貨を交換するブラックマーケットが十分に働いている。イラン・パキスタン国籍の外国人労働者は現金としてのドルを母国の家族に送り、現金を受けた家族がブラックマーケットで商品を買ったり、自国通貨に替えたりすることを必要に応じて行うのである。

送金行為は、このように故郷に現金を送ることで、彼らが日本で働いた労働が目減りすることを防ごうとして行われる。イラン・パキスタンからの労働者が多かった時期は、新たに入国してくる者と帰国する者という二つの流れが、常時存在していた。そこで帰国する者に現金を託し、新たに入国してきた者には帰国する者の仕事を紹介していた。しかし日本で不法就労者が問題になりだすとパキスタンとは1989年に、そしてイランとは1992年に査証の相互免除協定措置は一時停止され、この後、新たに労働者が入国することは事実上不可能になった。そのため本稿の時期においては、日本から出国の流れはあっても新たに入国してくる地縁・血縁者はいない。この空きがでた職についての情報が、地縁・血縁者に限らず流されるようになった。確かに、代々木公園や上野駅周辺のような外国人のたまり場となっていた場所では、仕事についての情報は以前からやりとりされていた。それが職長ネットのようなもっとミクロな領域でも当たり前のことになったのである。これは新しい出来事であり、イラン・パキスタン国籍の労働者の行為を規定する構造が変化したことを示している。

さて本節をまとめるにあたって、注意しておくことが二つある。一つはエスニックネットには、これまで注目されてこなかった職長ネットに規定されている面があるということである。職長ネットに関連しているエスニックネットほど仕事を得る確率が高まるのである。もう一つは、エスニックネット内部の仕事の分配をめぐる情報のやりとりは、これまで送金行為と対になって成立してきた。しかし、新しい人の流れが消されることによって、これまでのようには仕事を回すことができなくなってしまった。この部分が金銭と引き換えの情報となり商品へと転換されたのである。これまでの外国人労働者の仕事＝職のやりとりが商品と化した情報の交換に変わっても、雇う側にとって重要なのは誰の紹介によるものなのかということである。この点において、エスニックネットに職長ネットが課しているゲートキーパーとしての役割は全く変化していないのである。

5 3つのネットワークの重なりと連鎖のあり方

ところで、論じてきた、職長ネット、建設ネット、エスニックネットという3つのネットワーク

は互いに自律性を持ちながらも相互に重なり合っている。職長ネットは極めて狭い範囲で、建設ネットとエスニックネットは相対的に広い範囲をカバーしている。また、それぞれのネットワークは異なる原理によって成立している。職長ネットは、酒場における親方 - 子方関係の反映である労働をめぐる文化により成立する。建設ネットは、ある種の職長ネットであるが、労働をめぐる文化に依拠するものと言うよりは、元請けによる下請けの組織化というビジネスの関係に起因している。そしてエスニックネットは、仕事の紹介と現金での送金という対となった行為が、ある一定の集団のなかで行われるなかで必然的につくられたものである。

この全く異なる性質を持ったネットワークの関係が、外国人労働者の移動を論じる上で重要である。このネットワークの力関係を論じることなしに、外国人労働者の移動は理解できないからである。3つのネットワークの関係は、結論から言えば、職長ネットが、他のネットワークを利用しながら自己の必要労働力を組織化し、結果として外国人労働市場ともいべきものを生み出していたとして捉えられる。市場をオーガナイズするのは産業社会の末端で、日々を生き抜くのに精一杯で長期計画を持ち得ない中小企業の現場責任者であり、市場の組織化は彼らをとりにくく文化的条件と一体になって行われる。以下、このことを論じる。

職長ネットが持つイニシアチブは、仕事を得ることのできる確率の極めて高い情報であり、住居という生活基盤を提供できることにある。また、一般に既に雇用されている者の持つ信用で入ってくるのであるから、エスニシティの面からみてもそこには同胞がいるのであり、エスニックネットにも乗っていることになる。建設ネットの場合、住居は提供されるが、仕事のある現場から現場へと移動するので住居の移動距離が非常に大きくなり、移った先の近隣に同じエスニシティがいるとは限らない。この点でエスニックネットのフロントランナーとなる可能性は高いのであるが、フロントランナーとなった個人はより大きなリスクを負わなくてはならない。職長ネットへの道が開けると、特定の地域での小さなコミュニティを作ることが可能になるが、これはあくまで可能性に過ぎない。建設会社の社長 = 親方が労働者を仕事のあとに飲み連れていき、その場所に近隣の工場等の中小企業の職長が集まってくるという条件がないと、職長ネットには入れない。したがって、フロントランナーになるには、こうした場があるかどうかという偶然性に大きく左右される。

建設ネットがフロントランナーを生み出す要因になりやすいのは、建設業の下請け業者は、仕事があっても雇用関係を長期化させることを嫌う性向を持っていることにある。本稿における、建設会社b、建設会社d、建設会社eはたいてい半年以上に雇用期間が続くと、労働者に自発的に会社を去るような圧力をかけ始める。雇用をめぐるこうした習慣とも言うべき点は、外国人労働者を流動化させ労働市場を形成する。そして建設ネットが第一にそこから人を取り入れると同時に、本稿で扱ったような場があるときには、職長ネットという建設ネットとは異なるネットワークにも労働者が供給される。

本稿で論じている職長ネットAと職長ネットBでは、建設ネットを移動する場合より、職長ネットを移動するケースをより目にする事ができた。それは職長ネットの図1と建設ネットの図2とを比べれば一目瞭然である。職長ネット上の中小企業も、親会社からの注文によって、必要とする労働力は一週間単位で変化する。下請企業には、積極的に市場を開拓する能力はなく、親会社の生産計画によって自己の生産量が決定されるという極めて受け身の立場なのである。この生産量の変

化には、一定の範囲内であれば労働時間を変化させ対応する。しかしその範囲をこえると雇用人数の回路を通して調整するのである。

エスニックネットは、職長ネットと建設ネットから求職の情報を得て労働者を送り込む。エスニックネットが直接労働者売り込むことは少なく、この点ではむしろ情報の受け手なのである。そして、先にも述べたようにエスニックネットは、職長ネット、建設ネットの動きによって、そのネットワークを拡大させていく。どのような職長ネットあるいは建設ネットにフロントランナーが会うかによって、エスニックネットの行方は大きく左右される。

しかしながら、職長ネット上での移動は、そこでの移動が賃金の高さからみても有利である、ということにはならない。こうしたことから仕事に就く確率の高い職長ネットから自発的に離脱しようとする移動が、しばしば見受けられる。これまでは、職長ネット 建設ネット エスニックネットという関係では、雇用者側の意向が外国人労働者の移動に重要な役割を果たすと論じてきた。だが外国人労働者が一方的に受け手であるにとどまらない状況もまたみられる。つまり新しい職を得る見込みがなかったり、より確実性が低いにもかかわらずエスニックネットでの移動を敢えて試みたり、場合によっては自己の選択として失業を選びとる。こうした職長ネットから離脱しようとする動きが同時にみられる。外国人労働市場は、労働力の買い手である職長ネットに組織されると同時に、外国人労働者の側からも流動化するような力が加えられて初めて成立する。次節ではこの点に絞って論じる。

6 外国人労働者の移動と社会的必要

ここでどのようにして職をより確実に得ることができる職長ネットから、外国人労働者が退出していくかをみってみる。職長ネットによる移動は職を確実に得る移動ではあるが、高賃金への移動とは限らない。職長ネット内の企業は、同じ文化的背景を持つ職長達がたまたま同じ場に来ることによってできたネットワークであるが、それぞれの企業の生産性は様々である。本稿で取り扱った職長ネットの事例では、職長ネット内で賃金が一番良いのは建設業の各社である。建設各社は、抱えている現場によっては休日なしの場合もあるが、そのほとんどは日曜日は確実に休日である。屋外労働のため残業時間も限られている。稼ごうとする目標金額の達成が比較的容易である一方で、自由時間も確保できる。だが職長ネット内の他の産業に移った場合、目標額そのものを減少させるか、目標額獲得のための予定期間の延長を余儀なくされる。そのうえ労働者は、単位時間当たりの賃金の低下により、より多くの時間を労働にとられ自由時間をへらさざるを得なくなる。本稿の事例でいえば、たとえば建設業dでは時給1,725円に対して製造業1と製造業2では時給680円であり、時給にして約2.5倍の格差がある。しかし、製造業の事業者が非合法就労者をも雇用せねばならないときは、多くの場合に残業時間も長いので月額のみみたときの収入には余り差がない。職長ネット内の仕事は、このように格差があるようであり、実は月当たりの手取額では差がない。しかし、同じ額を稼ぐために費やさなければならない労働時間と労働強度に大きな違いが存在し、そのために労働者の生活様式にも大きな違いが生まれてくる。そして、時給の低い外国人労働者は、日本で働くうちに当たり前になった生活様式が維持できなくなったときに、仕事を得る可能性が低くても敢

えて職長ネットを離れていく。

この移動を「政治的必要(political necessary)」という観点を手がかりにして考察を進めてみる。ステュアートは以下のように説明した。労働者は一定の期間にわたってある賃金額を獲得しているうちに、特定の生活様式を当たり前のように認知するようになる。この当たり前と認知された生活様式は労働者にとって、あたかも権利のようなものになる。これは周囲の同胞からも承認されたものであり、それゆえこの生活様式を満たすことができないと、労働者個人はそれを奪われたとみなす。ひとたび確立した生活様式を低い生活様式へ下降させることは困難であり、ときには自己の生存に生理的に必要な生存資料の一部を犠牲にしても、労働者はそれを守ろうとする。この維持されなければならない生活様式をステュアートは「政治的必要」と呼ぶ(Steuart, Sir James, 1766, pp.270-271, 小林監訳, 1998, pp.283-285)⁽⁴⁾。

ステュアートのいうところの政治的必要は、現代の外国人労働者にも存在する。それには外国人労働者個人がこれまでどういった場所で働き、どのような額の賃金をもらっていたのか、身近な知り合いがどのくらいの額をもらっているか、ということでバリエーションがある。しかし、自己が当たり前と思えば他者から見ても妥当で、習慣と化した生活様式に規定されているという点において、ステュアートの政治的必要となんらかわりのないものである。つまり、準拠枠である自己にとっての当たりの水準は、自己の経験との比較であると同時に、自己が基準とする他者との比較でもある。そしてこの比較は給与額だけでなく、労働時間にもおよぶのである。

準拠枠との比較ということに加えて、維持されなければならない水準は、外国人労働者が使用者との間で行う働く者の闘争の結果でもある。使用者である職長が賃金の切り下げを要求してきたり、サービス残業を強いてくることもある。彼らは個別に職長と交渉を行うが、結果として、外国人労働者が自らの生活世界を捨てる決意をすることがある。すなわち、外国人労働者が自らの意志で失業を選択する場合もあるのだ。こうして規定される準拠枠は、「社会的必要」と言ってもよいだろう。本稿における社会的必要は、既に述べたような彼らが滞日経験のなかで獲得した生活水準である。つまり、住居については一人住まいなら1Kのアパートあるいはワンルーム、二人ならば6畳2部屋にキッチンつき、さらに必需品としてテレビ、電話、ビデオ、CDカセットに、自動車の所有も珍しいものではないというものである。社会的必要が存在することによって、移動を行う労働者に、労働者が受け入れ可能な最低賃金が生まれる。しかし、この最低賃金は単位時間当たりの金額ではなくて、一カ月当たりに稼ぐことが可能な総獲得額である。この総獲得額が稼ぎ出せる

(4) ステュアートにあって「政治的必要 (political necessary)」は、「生理的必要 (physical necessary)」と対になる概念である。後者が一切の贅沢品を含まない、肉体的生理的な人間の身体の維持にのみ必要なものを指すのに対して、前者は人間の身分に結びついた社会的存在に必要な全てを含むものである。この政治的必要を言葉の指す内容に即して言い換えると、「社会的必要」であることは大森も指摘している(大森, 1996, p.204)。なお私が参照したステュアートの原書は彼自身が出版した『経済の原理(初版1766)』である。邦訳書はステュアートの死後に出版された『著作集版 経済の原理(1805)』を底本としているので、邦訳書に記されている原典ページとは、私の参照した原典ページは一致しない。ステュアートの議論の射程と限界については『小林昇経済学史著作集 第x巻』・ステュアート新研究(小林, 1988)、『ステュアートとスミス』(大森, 1996)を参照のこと。

ことを条件とした上で、彼らはこれまで獲得した生活様式を守ろうとするのだ。

彼らなりの社会的必要をスタンダードと化し、それに照らし合わせて仕事を続けるかどうかが決まる。失業の危険は、複数のネットワークに関係しながら最小化しようと試みられる⁽⁵⁾。しかしそれにもかかわらず、ある限度をこえたときに、外国人労働者は敢えて失業を選択する。これは労働者がエスニックネットのフロントランナーとなることで、移動を行う個人としては大きなリスクを背負うことになるが、エスニックグループにとっては新しい職長ネットに入り込むチャンスになる。職長達に創り出された労働市場は、こうして外国人労働者の側からの選択も加わって、常に刷新されていくのである。

7 結語にかえて

本稿はイラン人・パキスタン人の職業的・地域的移動を支配する3つの異なるネットワークに焦点を当て、その中で最も小さな範囲で成立する職長ネットが広範な労働者の移動を組織化していることを論じた。最後に注意しなければならないのは、職長ネットは労働者の移動を水路づけるためにつくられたものでもなければ、職長自身も意図的に労働者の流れをつくっているのでもない。この意味で、職長ネットとはあくまでも観察者から見た限りでのネットワークであり、ネットワークを構成しているアクターたちは必ずしもネットワークを自覚的に構成しているのではない。それは現業部門の責任者と労働者の間にある、親方-子方関係の間に成立していた労働をめぐる文化が外国人労働者にも及ぶことで初めて機能した社会関係である。

国際労働移動を引き起こすマクロな要因としては国内労働市場に於ける労働需要と労働供給の齟齬にその大きな原因を求める（Crook, 1997, pp. 176-179）ことは有効な分析に違いない。しかしながら国内に於ける外国人労働者の移動を分析するには、外国人労働者の移動を支配する具体的なエージェント達を観察しなくてはならない。しかしながら最初に述べたように外国人労働者をめぐる環境は日々変化している。本稿で述べた状況は既に現時点の移動を説明するには無理のある部分が生まれている。それは本稿で述べた移動において、とりわけ労働者側からの移動において重要な契機になっている労働者の送金行為である。本国へ帰国する者が少なくなった現在では、送金行為を媒介にして仲間内で仕事を回しながら移動を行うことはほとんど不可能になった。現時点では、外国人労働者の側にも職業の斡旋を専門に行うものがない、彼らもっばら労働者側の流れを創り出していることを簡単に指摘しておく⁽⁶⁾。この点については稿を改めて論じることとする。いずれにせ

(5) 稼げる給与額と労働時間とを鑑みながら、外国人労働者は次のチャンスをうかがう。長期にわたってこの満たされるべき範囲から、この時点では具体的には、本稿のはじめにで触れた生活水準を守ることができないと外国人労働者が理解すると、労働者はエスニックネットを使って移動していく。エスニックネットの図における製造業4から外に伸びる線がこのような移動を示すものである。建設業にいる間は、たいていこの水準より大きく上回る額を稼いでいるので、エスニックネットを使って退出することは余りみられない。

(6) こうした新しい現状については拙稿「資格外就労者における分極化の進展と労働市場」（丹野，1998）を参照のこと。

よ本稿に於ける職長ネット，建設ネット，エスニックネットの重なりは，こうした点である特定の時期の制約を受けていることをことわっておく。

(たんの・きよと 一橋大学大学院社会学研究科博士課程)

【参考文献】

- Crook,Nigel,1997,*Principles of Population and Development*,Oxford University Press
- Harris,J./Todaro,M.P.,1970, "Migration,unemployment and development:a two sector analysis" ,*American Economic Reiveiw*, 60(1),March
- 小林昇,1988,『小林昇経済学史著作集 第×巻 J.ステュアート新研究』,未来社
- 倉真一,1995,「景気後退下における在日イラン人 出身階級・生活機会およびその獲得戦略を中心に」『年報社会学論集』第8号,関東社会学会
- 大森郁夫,1996,『ステュアートとスミス 「巧妙な手」と「見えざる手」の経済理論』,ミネルヴァ書房
- Piore,Michael,1979,*Birds of Passage Migrant Labor in Industrial Society*, Cambridge University Press
- Portes,A.,Jensen,L.,1987, "What's an Ethnic Enclave? The Case for Conceptual Clarity" ,*American Sociological Review*,52,No.6
- Portes,Alejandro(ed.),1995,*The Economic Sociology of Immigration*,Russell Sage Foundation
- Ricardo,David,1821,On the Principles of Political Economy and Taxation,Sraffa, Piero(ed.),1951,The Works and Correspondence of David Ricardo, Volume I, Cambridge University Press,羽鳥卓也・吉澤芳樹訳,1987,『経済学および課税の原理』上巻,岩波文庫
- Sassen,S.,1983, "Labor Migration and the New Industrial Division of Labor" ,Nash. J./Fernandez-Kelly,M.P.(ed.),*Women Men and the International Division of Labor*,State University of New York Press
- ,1988,*The Mobility of Labor and Capital:A Study in International Investment and Labor Flow*,Cambridge University Press
- 島田りさ,1997,「建設業で成り上がり」,『GAT'N 働いて強くなる。仕事メディアガテン』10.23 NO.20 リクルート
- Steuart,Sir James,1766,The Principle of Political Economy,小林昇監訳竹本洋他訳,1998,名古屋大学出版会古典翻訳叢書『経済の原理 第1・第2編』,名古屋大学出版会
- Stiglitz,J.E.,1974, "Alternative theories of wage determination and unemployment in LDC's:the labor-turnover model" ,*Quaterly Journal of Economics* 88
- Stirati,Antonella,1994,*The History of Wages in Classical Economics*,Edward Elgar
- 丹野清人,1998,「資格外就労者における分極化の進展と労働市場」,町村敬志編,平成7年度~平成8年度科学研究補助金(基盤研究c2)研究成果報告書『ポストバブル期の大都市における階層分極化の研究』(課題番号07610168)

謝辞 本稿を作成するに当たって一橋大学教授梶田孝道氏，一橋大学大学院博士課程樋口直人氏には，最初の構想の段階から貴重なコメントを頂いた。さらに一橋大学教授加藤哲郎氏，一橋大学助教授町村敬志氏にも多くのご指摘を頂いた。これらの方のご助力に感謝します。